

<市長対談>

吹田市 後藤圭二市長 × 吹田青年会議所 第49代理事長 中村昭一



写真左：吹田青年会議所理事長 中村昭一、写真右：後藤圭二 吹田市長、

中村理事長（以下、中村）：本日はお時間を頂きありがとうございます。青年会議所（JC）は1年ごとに新たな運営体制のもと活動します。私も2018年に1年間理事長を務めることになりました。今年も引き続き、後藤市長をはじめとする行政、関係諸団体と連携してまちづくりに力を注いでいきたいと思えます。

後藤市長（以下、後藤）：本日はありがとうございます。よろしくお願いいたします。

中村：今年度は、私たち青年会議所のネットワークを活かした事業として、姉妹提携をしている香港の青年会議所と合同で行う国際交流事業や、「わんぱく相撲」などの子どもを対象とした青少年育成事業を実施したいと考えています。中でも今年の国際交流事業では、吹田市の青少年を連れて香港の現地へ行き、現地の青少年と交流することを通じて、SDGs（持続可能な開発目標）など世界共通の課題に対する見識を深める機会を作りたいと考えています。世界中で活動する青年会議所は国連と連携し、様々な事業を通じてSDGsの目標達成に向けた取り組みを行っています。詳しい内容については、現在、香港のメンバーとまきしく事業案を練っているところです。例えば、食や環境に関する課題へのアプローチも考えられると思えます。

後藤：食文化や環境に対する価値観は各国それぞれに異なるので、目の前で見えている課題を1つ解決するだけでもそう簡単ではなく、相手の文化や価値観をよく理解することが

重要だと思います。ご紹介のあった事業に限らず、吹田青年会議所には、例年「吹田まつり」の企画にも多くの場面で関わってもらっています。このような場面を通じて、今後も行政と連携するなど地域で力を発揮していただきたいと思います。

中村：ありがとうございます。よろしければこの機会に、今後の吹田青年会議所への期待など、後藤市長の当会に対する思いをぶつけてください（笑）。

後藤：現在の社会は個人単位のゆるやかな連帯が主流であるのに、青年会議所はその逆に行くようにも思います。言い換えれば「組織力」がある。それは決して時代遅れだというわけではなく、場面ごとにさまざまな力を発揮するチームが地域には必要とされています。地域のことは長いあいだ主に自治会が支えてきました。ここ 10 数年は NPO も活発に活動しています。今後は、それだけではないチームの力が更に合わさって、より良い地域ができるのです。青年会議所には、そうした時代の変化も捉えつつ地域に参加するのがカッコいいと思える存在となってほしい。

後藤：行政は公平な立場であるからこそ、踏み込みにくい分野もあります。たとえば地域の“一番”を発掘して、スポットライトを当てることです。青年会議所の若者世代ならではの感性で地域にある魅力的な“一番”に光を当てるのはどうでしょう。あまり広くは知られていないけれども、世界一の選手や技術、ツウな人たちの間で話題の飲食店や穴場スポットなど、吹田のまちには市民の方々が気づいていない魅力が驚くほどたくさんあります。行政にはできないことに果敢に取り組んでほしいと期待しています。

中村：ありがとうございます。市長からの熱いエールを受け取りました。私たち吹田青年会議所は翌年で50周年を迎えます。今後も一層、地域に必要とされる団体として様々な活動に力を注ぐことで、青年会議所が目指す「明るい豊かな社会」を築くための運動を進めていきます。本日はありがとうございました。改めて一年間宜しく願いいたします。

※以下のズームアップした写真も挿し込みたいと考えています。

